

「2023年度国立台湾大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学法学部2年 山本 真理子

① 今回の派遣に参加してきたことで、語学に対する学習意欲がさらに上がったと感じられる。13年ぶりに海外に行ったため、日本語が通じないという環境に身を置いたのはほぼ初めてだった。トラブルが起こった時も友達と助け合ったり、英語を絞り出したりと何とかして乗り越えてきたが、日本にいるときと比べ物にならないほど緊張し、ストレスがかかった。英語や自分がいる国の言葉を話せることは、安全かつ安心して過ごすために必要不可欠なことであり、かつその国において選択肢を広げることになるのだと痛感した。もっと積極的に外国語を使って語学力を上げていきたい。また歴史や政治、宗教といった教養の必要性も実感した。台湾大学で、マカオや香港、スイスなど様々な国の人々と話す機会に恵まれたが、彼らが自国の歴史や文化について、確かな知識と誇りを持ちながら、堂々と議論している姿が印象に残っている。彼らのように多くの知識を身につけ話し合える力をつけたいと改めて思った。そのためにも、世界中で長い間読まれている書物を読み、日ごろの勉強にも励んでいきたい。

② 台湾で生活している中で、日本との共通点や相違点が多く見つかった。例えば、台湾のMRTでは電話をかけている人は頻繁にいたが、飲食は厳重に禁止され破った場合は罰金を科せられている決まりである。日本では人々のモラルにある程度任せている部分も、台湾ではしっかりとルールが定められており、その分徹底的にMRT内はきれいに保たれている。日本と台湾のどちらのやり方が良いかは一概には言えないが、それぞれ利点と欠点があり、それらを分析することが大切だと考えた。

③ プログラムの中の講義で台湾の社会問題について知る機会があった。台湾では少子高齢化が急速に進んでおり、人口確保のために外国からの労働者を多く募る必要があること、それにも関わらず、介護などに従事している労働者の待遇が悪く、永住権が認められにくいことなどが問題であると分かった。日本をはじめとした経済の発達した国も同様の問題を抱えている。日本でも外国人技能実習生の待遇が問題になったことがある。何が正解かは分からないが、同様の問題を持っている国同士で学び合い、協力し合って、解決策を模索していく必要があるのではないだろうか。

④ このプログラムに参加したことで、留学への興味がさらに増した。一つの国に留まっていたら、その国の価値観や習慣にどうしても縛られてしまう。確かに頭では、世界には様々な価値観や文化があると分かっているが、それを実感するためには一度海外へ出ることが必要だと考える。あえて自分が少数派となる環境に身を置くことで、より幅広い思考力と強い精神力が培われるのではないだろうか。日本の常識とは異なる国に行くことで、日本の良いところと課題点も見つけることができると思う。